

柳川啓一と折口信夫

島田裕巳

(昭和54年修士修了)

東大の駒場には全学一般教養ゼミナールという一般教育科目がある。とかく批判の多い大学での一般教育改革の一つの試みであるようだが、駒場の学生にとってはやがて自分が進学する本郷の教官に接することのできる数少ない機会ともなっている。必修科目ではないせいで、教える側も自由にその内容を決定できるため、扱われるテーマは多岐にわたり、学生の知的な欲求を幾分かは満足してくれる場ともなっている。ただし、演習形式をとるために、ほとんどの科目では定員が設けられ、人数が多い場合にはレポート等を書かせて、超過した分をふるいにかけることが一般的である。

私が駒場の1年生で、ストのために一週間程しかなかった秋休みを終えて、2学期を迎えた時も、大部分の一般教養ゼミナールは定員を設けていた。

ところが、その中で珍しく全く定員なしという科目があったのである。しかも、その科目を担当しているのが本郷の文学部の教官であった。題目は「柳田国男と折口信夫」。題目も仲々魅力的であったが、それ以上に定員を設けない姿勢に興味をおぼえて、その教室へ出掛けていった。それが、柳川先生との最初の出会いであった。

定員がまったくないせいで教室は学生で溢れていた。その大勢の学生の前で先生は、柳田と折口について語り、やがて回を重ねて学生の側が順番に発表することになっていった。私はそこからは確か出席しなかったように思う。

そのゼミでの講義の中で印象に残っているのが、折口信夫についてのあるエピソードである。生涯独身であった折口は、女性よりも男性を愛した人

物である。彼の弟子もその愛情の対象たるを免れなかった。柳川先生は、折口の弟子の1人の回顧録を紹介し、深夜、折口が布団に寝ているその弟子に迫る場面を講義してくれた。そのおぞましい場面を、先生は嬉々としてというべきか、ユーモラスな調子で学生たちに語ってくれたのである。妙にその箇所だけが記憶に残っている。他の講義の内容はまったくといていいほど、今は思い出せないのにである。その話に刺激されてか、折口の『死者の書』を読み、「民族史観における他界観念」にチャレンジしたように記憶している。

こういったことがきっかけで、宗教学という学問が存在することを知り、続く2年の3学期には柳川先生の「宗教史」の講義を取って宗教学に進学することになるのだが、やはり折口の話は、どこかでその選択に幾分影響しているように思える。柳川先生は講義の題目に「柳田国男と折口信夫」と掲げ、柳田については「官の科学・野の科学」という論文を発表したりして、柳田になみなみならぬ関心を寄せているのは事実であるが、折口に大いに引かれる部分があり、学問のスタイルの上でもいささか共通するところがあるようにも思え

る。例えば、折口の関心は日本人のアーカイックな思考であり、深層の文化であるが、彼は、のすたるぢい、あたるずむといった英語的な表現を使い、方法には幾分「バタ臭い」ところがある。それは柳川先生にも言えることで、研究の対象を村を中心とした伝統的な社会に置きながら、常に欧米の最新の理論に注目しつづけている。折口の学問も、そして柳川先生の学問も、それが民俗学と対象を同じくしながら、民俗学の枠におさまりきらないのは、そこに普遍性を求める指向性が常に働いているからであろう。

そしてまた、女を排除した「男の講」という共同体を重視し、それを理想とする傾向のある柳川先生の学問は、どこかで折口の感覚世界と共鳴しあっているのかも知れないのである。柳川先生は、「ゼミナール分類学—儀式・道場・祭り・菜園—」の中で、いくらか得意そうに、こう述べている。「ある女子学生は私のゼミの男子学生に対して『皆ホモみたい』というきわめて適切な批評を下した」。柳川ゼミなくて、柳川学なしということであろうか。